る294例（以下B群）について検討を行なった．疾患の内訳はA群では多岐にわたっていたが，B群では95.6%が肺炎で，60才以上の高令者がA群で70%，B群では85%を占めた．A群の肺炎・肺化膿症とB群の起因菌の分離頻度は緑膿菌を除くとほぼ同様であった．緑膿菌はA群4.0%，B群では9.5%，交代菌を含めると14.3%となり起因菌の1位を占めた．緑膿菌による呼吸器感染症は125例みられ，全体の約10%にあたり，うち肺炎は50例であった．緑膿菌性肺炎では42例が基礎に脳神経疾患を有し，32例に気管切開，気管内挿管がなされ，先行薬剤としてステロイド，抗生剤も極めて高頻度に使用されていた．脳神経疾患患者は緑膿菌性肺炎の発症頻度が相対的に高く，しかも致命的となりやすい．かかる症例においては本菌の関与を常に念頭においた治療が必要である．

8） Vibrio vulnificus による敗血症の1例

尾崎　京子・高野　　操（新潟大学附属病院検査部）
小柳　典子・狩野　倫佳
蒲沢　知子　（新潟こばり病院）

Vibrio vulnificus による感染は比較的稀であるが，敗血症では死亡する例が多い．今回私達は急性腎不全を併発し，死亡した V. vulnificus による敗血症例を経験したので報告する．

症例は55才，男性．僧帽弁狭窄症，心房細動と肝硬変の為，通院加療中であった．昭和60年7月28日夕食にアナゴを食べ，29日午前0時頃より39°C 台の発熱と水様性の下痢をきたした．未明より四肢特に下肢に硬結を伴った発疹が多数出現し，圧痛が著明であった．29日新大附属病院を受診し，血液培養施行後市内の病院に入院した．

入院時の検査所見は GOT 132IU/l, GPT 58IU/l, TB 4.0mg/dl, BUN 31.6mg/dl, Cre. 2.3mg/dl と肝障害と腎障害がみられたが，WBC 3,900/mm^3, CRP 3＋，血沈は7mm であった．CET 1.0g の投与を行ったが急性腎不全を併発し，発病後24時間で死亡した．

細菌学的検査では血液培養よりグラム陰性桿菌が検出された．分離菌の性状は運動性（＋），オキシダーゼ（＋），グルコースの発酵性（＋），好塩性（＋），ONPG，ラクトース，サリシン，セロビオース（＋），サッカロース（－）で V. vulnificus と同定された．感染経路としてアナゴによる経口感染が疑われた．

本邦における V. vulnificus 感染症症例の文献的考察をあわせて報告する．

9） 再発性ブドウ球菌敗血症に骨髄炎を併発した1例の治療経験

武田　　元（長岡赤十字病院内科）
高橋　　甲（　同　整形外科）

症例：62才，男．

病歴：15年前より糖尿病で近医より治療を受けていた．昭和60年10月6日突然腰痛が出現し，歩行困難となり翌日整形外科に入院した．入院時より高熱がみられ，血液培養で S. aureus を分離し，CPM の投与で解熱傾向にあった．骨シンチグラムなどで異常がみられず，敗血症，糖尿病の治療のため内科に転科した．CEZ，MINO の併用で速かに解熱した．腰痛は軽快し，転科後4週間で治療を終了した．血沈の亢進，高ガンマグロブリン血症が続いていたが，11月4日に退院した．しかし，12月下旬より腰痛が再出現し，血沈の亢進，高ガンマグロブリン血症も増加したため，昭和61年1月17日内科に再入院した．入院時高熱がみられ，尿と血液培養で S. aureus を分離した．CMZ の投与を開始して速かに解熱したが，腰痛が軽快せず，整形外科を再受診した．前回入院時に異常がみられなかった第12胸椎椎体の破壊像がみられ，骨髄炎や腫瘍転移が疑われた．骨生検の結果，骨髄炎と診断されて CMZ の投与2カ月以上続け，腰痛も軽快して退院した．

10） 黄色ブドウ球菌菌血症の検討

和田　光一・田崎　和之（新潟大学医学部第二内科）
五十嵐謙一・森本　隆夫
庭山　昌俊・荒川　正昭
尾崎　京子・高野　　操（　同　検査部）
小柳　典子・狩野　倫佳

当科において最近10年間で発症した黄色ブドウ球菌菌血症23例を検討した．

黄色ブドウ球菌菌血症は，1976年から1980年までの5年間では3例発症したが，1981年から1985年までの5年間では20例発症し，そのうち10例はメチシリン耐性ブドウ球菌（MRSA）による菌血症であった．黄色ブドウ球菌菌血症の focus は，皮膚・軟部組織と血管留置カテーテルが各々8例であった．予後を検討すると，メチシリン感受性黄色ブドウ球菌による症例は13例全例除菌されていたが，MRSA による症例は10例のうち3例が死亡した．全体の除菌率は87%であり，緑膿菌菌血症の除菌率45%より良好であった．

最近黄色ブドウ球菌菌血症が増加している原因は，グラム陰性菌に強く，ブドウ球菌に抗菌力の弱いセフエム系抗生剤が頻用されていることと，血管カテーテル留置例が増加してきたためと思われる．